

平成 28 年度

第 1 回

地域自立のための「人づくり  
・学校づくり」実践委員会

議事録

平成 28 年 5 月 31 日 (火)

第1回 地域自立のための「人づくり・学校づくり」実践委員会 議事録

1 開催日時 平成28年5月31日(火) 午前9時30分から午前11時30分まで

2 開催の場所 県庁別館9階特別第一会議室

3 出席者 委員長 矢野 弘典  
副委員長 池上 重弘  
委員 奥島 孝康  
委員 片野 恵介  
委員 加藤 暁子  
委員 加藤 百合子  
委員 清宮 克幸  
委員 白井 千晶  
委員 鈴木 竜真  
委員 竹原 和泉  
委員 埴 博  
委員 藤田 尚徳  
委員 藪田 晃彰  
委員 渡邊 妙子  
  
知事 川勝 平太

4 議 事

(1) 副委員長選出

(2) 報告

- ・平成27年度県総合教育会議の成果
- ・平成28年度の検討事項及び年間スケジュール(予定)

(3) 意見交換

- ・高等教育機関の機能強化と知的・人的資源の活用

(4) その他

【開 会】

事務局： それでは、定刻になりましたので、ただいまから第1回地域自立のための「人づくり・学校づくり」実践委員会を開催いたします。

本日はお忙しい中、当委員会に御出席いただきまして、誠にありがとうございます。

私は、本日司会を務めさせていただきます、文化・観光部総合教育局の鈴木でございます。よろしく願いいたします。

なお、本日は部屋の中が暑くなっておりますので、適宜上着等は脱いでいただくようお願いいたします。

まず、お手元の次第がとじてある資料を御覧ください。

3枚めくっていただきますと、1ページに「資料1 地域自立のための「人づくり・学校づくり」実践委員会設置要綱」がとじ込んであると思います。

昨年度発足した当委員会ではありますが、第3条第2項の規定にあるとおり、委員は知事が委嘱することになっており、また、委員の任期については、第4条第1項の規定のとおり、委嘱の日から年度の末日までとなっております。

このため、昨年度から引き続きの委員の皆様にも、改めて委嘱状を交付しておりますので、お手元に配布させていただいております。御確認をお願いいたします。

また、当委員会の委員長は、第5条第2項の規定に基づきまして、知事の指名により、矢野弘典委員をお願いしております。矢野委員長よろしくをお願いいたします。

次に、資料を1枚お戻りいただきますと、実践委員会の委員の名簿一覧が添付してございます。

昨年度の委員のうち、飛龍高等学校校長の堀田和美様、ユニット・デイサービス「すまいるほ一む」管理者の六車由実様が退任され、新たに名簿の中段、静岡大学人文社会科学部教授の白井千晶様、それから二つ下の横浜市立東山田中学校学校運営協議会会長の竹原和泉様、また二つ下の藤枝明誠中学校・高等学校校長の埴博様に御就任をいただいております。

なお、本日は名簿の中段、後藤委員、その四つ下の仲道委員、下から4番目のマリ・クリスティーヌ委員、その下の宮城委員の4名が所用により欠席となっております。

それでは、開会に当たりまして、知事から御挨拶申し上げます。

川 勝 知 事： 皆様、おはようございます。

本年度のこの実践委員会、第1回目を開催することになりまして、昨年度に引き続きまして、矢野委員長初め、継続して委員に御就任賜った方々、よろしく願い申し上げます。

また、今年度から白井委員、そして竹原委員、それから埴委員、3人にお加わりいただきましてありがとうございました。既に静岡県の関連の委員会で御経験済みと存じますけれども、忌憚のない御意見を賜りたく存じます。よろしく願いします。

これは、改めて申すまでもありませんが、今年度2年目ということですが、実質は3年目です。もともとの名前は、地域とともにある学校づくり検討委員会として始めました。

その理由は、昨年4月から、教育委員会だけに教育を任せるのではなくて、社会総がかり、あるいは地域ぐるみで、皆で子供たちを育てていこうということで、総合教育会議というものを始めることになり

まして、そのために、首長が教育委員会に出て意見を述べて、そこで実践していくということになったわけですが、やはりいろいろな首長さんがいらっしゃいます。

それで、私も教育の中立性、安定性、継続性という基本的な理念に照らして、皆様方全ての意見をどのようにして集約したらいいかということで、この検討委員会を昨年の総合教育会議が始まる1年前に定めまして、そして矢野委員長のもとで、皆様方に幾つかの柱を立てていただいて、これを実践するべしということで、その実践項目に沿って昨年1年間議論していただき、それを総合教育会議で私自身が発言し、場合によっては委員長、あるいは副委員長に御出席願って、そこで御発言を賜るというふうに運営してまいったわけですが。

その結果、例えばスポーツについては、子供が少なくなっているのも、いろいろなスポーツができにくいということで、清宮委員の御提言について、委員の皆様方全員の御賛同を得て、それから総合教育会議で決定いただきまして、地域のスポーツクラブを発足させるということで、この4月から既にその活動が始まっております。

それからまた、世の中にはたくさんの人材が埋もれておりますので、人材バンクをつくるべしということになりまして、人材バンクも今つくり上げつつあるということでもあります。

さらに、子供たち、先生を含めて、国際的な感覚を持った青年たち、あるいは社会人を養成していこうと、そのために社会から多く基金を募ろうということで、人材育成基金が、県と、それから県民の方々の御寄附によりまして、既に積み立てられております。

今年度は1億5,000万円ですけれども、10億円ぐらいを目指して、基金として利息でやっていきたいと思っております。ともかくお金は天下の回りものですから、人のために使うならいいということでやっていきたいと思っております。

今年度の最初の総合教育会議におきまして、総合教育会議の今年度の大きな議論の項目が定まりました。一つ目が高等教育機関の機能強化と知的・人的資源の活用、二つ目が徳のある人材の育成、三つ目が個々の才能や個性を伸ばす多様な学習機会等の提供、四つ目が地域ぐるみ、社会総がかりで取り組む教育力の向上、これが大きな柱であります。

しかしながら、社会は動いておりますので、その都度その都度でそれぞれお気づきになったこと、例えば、今日はこの新聞記事が配られておりますが、こうしたことを県下で実現するためには、こうしたほうがいいのではないかということで、別に5回と決まっているわけではありませんので、臨時の委員会は幾らでも開いていいです。

あるいは、今日の中日新聞の朝刊に、3階建てにして木造の校舎を優先的に建てたらどうかという記事が載っていました。

私は木造か鉄筋コンクリートかではなくて、鉄筋木造コンクリートで

いいと。全部合わせればいい、いいもの合わせればいい。大きな和は大和（だいわ）、大和（やまと）です。だから、大和（やまと）の心は、大きな和であるというつもりで、良いものは全部合わせればいいと思います。

しかし、老朽化で学校を新築しなくてはいけないという状態になっていますので、そのときに、ここで例えば、今日は農業士の方にも来ていただいておりますけれども、もっと山野を活性化するために、県産材を使えというようなことを言うていただければ、私は持って行くわけです。

そういうことを通しまして、実践のための委員会でありまして、決して議論のための議論をするところではないということでもあります。大所高所からの御議論は大切ですがけれども、実践におろしていくということで、文字どおり実践の現場でやっていらっしゃる方々、そして多くの人々を育ててこられた東芝ヨーロッパの社長、あるいは NEXCO 中日本の会長を務められた矢野先生に委員長をお務め願っていると、こういうわけでございます。

くどくど申し上げましたけれども、これがこの委員会の趣旨でございますので、これを踏まえられて、侃侃諤諤（かんかんがくがく）忌憚のない御意見を賜りまして、教育の現場に生かしていけるように、よろしく御審議のほどお願いを申し上げます。

事務局： ありがとうございます。

次に、矢野弘典委員長から御挨拶をお願いいたします。

矢野委員長： 昨年度から引き続きまして、委員長を仰せつかりました矢野でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

本年度から、白井委員、竹原委員、埴委員に委員として御就任をいただきまして、本当にありがとうございます。この1年一緒に仕事をさせていただくことを大変嬉しく思っております。

ただいま知事からお話があったとおり、この実践委員会の趣旨は誠に明快でございまして、今年度の課題を大きく四つ設けましたが、これに限るものではありませんので、これを一つのきっかけとして、御自由に意見を述べていただきたいと思います。

そして、何を目標にするかということ、去年もそうでしたが、具体的な実行目標をつくることにあります。総論的な部分は、あらゆるところで論議されておりました、かなり網羅されていると思いますので、問題は静岡県において、何が具体的に実行できるかだと思っております。

そういう観点で、去年1年間、皆様のお知恵をお借りしまして、幾つかの実行課題が生まれて、それが現実に人も配置され、予算も付き、組織も生まれて動き始めているということで、これについては心から

お礼申し上げます。

是非この実践委員会と名付けた委員会の目標を実現するために、本年も進んでまいりたいと思いますので、皆様のお力添えをよろしく願いいたします。

事務局： ありがとうございます。

次に、今回新たに委員に御就任いただきました皆様から御挨拶をお願いしたいと思います。

恐縮ですが、委員名簿一覧の上から順番に、まずは白井千晶委員から御挨拶をお願いいたします。

白井委員： 皆様、おはようございます。

はじめまして。静岡大学から参りました白井と申します。初めての方がほとんどですので、御挨拶をさせていただきたいと思います。

私自身は社会学の教員でございますけれども、まず、静岡大学について言いますと、昨年度からアジアブリッジプログラムという制度を始めまして、アジアの優秀な人材を静岡大学に迎える、また、入試についてもかなり踏み込んだ内容にして、現地入試をしたり、学費を初年度無料にしたりというようなことで、優秀な人材を静岡に招いて、また、県内の企業に御協力をいただいて、インターンシップを積極的に行って、県内でリーダーとして力を発揮していただく、また、学んだことを国に持ち帰っていただくということを始めておりますので、是非、県内での人材の活用というところで材料にさせていただければと思っております。

また、資料の中にあります、ふじのくに地域・大学コンソーシアムで、昨年度私自身が助成をいただき、研究をさせていただきました。その結果がこの「DVに悩むあなたへ」ということで、静岡新聞の一面でも取り上げていただきましたが、今、外国人の母子にいろいろな問題が起きておまして、この助成費をいただいて、外国人の方の母語で提供する資料を、昨年作成させていただきました。外国人児童の問題のところで御活用いただければと思っております。

また、私自身は子供の福祉に関心を持っておまして、里親や養子縁組、子供の貧困、女性の健康などの研究をしておりますので、何かその点でお役に立てることがあったらと思っております。

まだわからないことばかりですが、皆様と一緒に、地域のために頑張っていきたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

事務局： ありがとうございます。

次に、竹原和泉委員、お願いいたします。

竹原委員：皆様、おはようございます。竹原でございます。本日はよろしくお願  
いいたします。

私は東山田中学校学校運営協議会にかかわり、学校と地域を結ぶコー  
ディネートをして12年目になります。大学時代に岩手県の漁村でボラ  
ンティア活動をしたこと、もう一つは、東京都の代表でワールドユ  
ースキャンプに参加し、世界の若者と寝食を共にした経験、その二つが  
今の私をつくっていると思います。

子供を育てる時期、夫の転勤によって、フランスとアメリカで子育て  
をしましたが、フランスでは総がかりで子供を育てるという社会に支  
えられ3人の子供を育てました。そして、アメリカでは学齢期でした  
ので、学校と地域がどのようにつながっているか知ることができまし  
た。

学校と地域を結ぶときに、学校教育と地域との関係を変えることが必  
要かと思います。オーナーシップ、全ての人が担い手であるという仕  
組みを日々の活動からつくっていきたいと思っております。

様々な人が関わる時、大人同士の連携、協働が求められますが、そ  
れぞれ文化や価値観が違いますので、そこをつなぐことがとても難し  
いと考えています。

これからはさらに、知事部局の方、企業の方、様々な専門の方とつな  
ぐコーディネート機能が大事になるだろうと思っております。

それから、先ほど、冒頭に知事のおっしゃった学校の耐震化や老朽化  
による建て替えということに関して、被災地から東山田中学校を見に  
いらっしゃって、学校の中に地域の人が集う場、交流の場があり、小  
さな公民館のような機能を持ち、常に地域の情報と人が集まり、コー  
ディネート機関になっていることを御覧になっています。

そして被災地では、次々とそういう空間を取り入れた学校が建てられ  
ています。

この会議に加えさせていただきましてありがとうございます。勉強さ  
せていただきます。よろしくお願いいたします。

事務局：ありがとうございました。

次に、埴博委員、お願いいたします。

埴委員：藤枝明誠中学・高等学校の校長で埴と申します。よろしくお願いま  
す。

私学ですので、学校としては結構小回りがきくということで、昨年強  
引に国際教養コースというコースを設置いたしました。交流事業、そ  
れから留学生の受け入れ、これを盛んに行いまして、そのコースだけ  
ではなく、学校全体が変わってきました。生徒さんたちの意欲や向上  
心が、全体に及ぶようになりました。

例えば、英検一つをとってもそうなのですけれども、中の下ぐらいの

クラスでも、一クラス全員準1級、1級に合格して、これは子供たちにとってかなり自信になっています。

それから、異文化に対して抵抗感なくコミュニケーションがとれるようになるということで、学校としては非常に喜んでおります。

進学などと言っておりますと、なかなか保守的になってしまうのですが、私学ということもありまして、強引に事が進めやすいという、そういう性格がございます。

今日は初めて皆様にお目に掛かることができまして、幸いに存じます。今後ともよろしくお願いいたします。

事務局： ありがとうございます。  
それでは、議事に入ります。  
これからの議事進行は、矢野委員長をお願いいたします。

矢野委員長： それでは、次第に基づきまして、本日の議事を進めたいと思います。  
まず、地域自立のための「人づくり・学校づくり」実践委員会設置要綱第5条第3項に基づきまして、副委員長を指名したいと思います。  
昨年度に引き続き、池上委員に副委員長をお願いしたいと思いますが、池上委員、いかがでしょうか、よろしいでしょうか。

池上委員： かしこまりました。謹んでお受けいたします。

矢野委員長： ありがとうございます。  
それでは、池上委員に副委員長をお願いすることといたします。どうぞ本年度もよろしくお願いいたします。  
それでは、副委員長席にどうぞ。  
(池上副委員長が副委員長席に移動)  
続きまして、報告事項につきまして、事務局から一括して説明をお願いいたします。

事務局： 事務局から、平成27年度総合教育会議の成果について、御報告をいたします。  
お配りしました資料の2ページをお開きください。  
昨年度の総合教育会議の成果の一つは、5回にわたる総合教育会議の協議を踏まえて策定されました、ふじのくに「有徳の人」づくり大綱でございます。  
本日、お手元に大綱をお配りしてございます。富士山が表紙のリーフレットでございます。  
本県の大綱は、教育の基本理念として、ふじのくにの未来を担う「有徳の人」の育成を掲げ、文武芸三道の鼎立の実現などを基本姿勢として定めまして、更に、重点取組方針として、教職員及び高校生の国際



化の推進など、八つの項目を掲げてございます。

昨年度の総合教育会議のもう一つの成果は、四つの協議題におけるそれぞれの合意事項が、平成28年度の新規事業として予算化されたこととございます。

2ページの下段には、昨年度の四つの協議題と合意事項を記載してございますが、1枚めくっていただいて、3ページから8ページにかけて、協議題別の合意事項と事業化状況を記載してございます。

表のうち、太字、太枠のものが新規事業でございます。これら新規事業を中心に主な事業を説明させていただきます。

恐れ入りますが、9ページをお開きください。

9ページ記載の教職員及び高校生の国際化につきましては、ふじのくにグローバル人材育成基金が新たに設けられることとなりました。

国の内外で活躍するグローバル人材の育成を社会総がかりで支援するため、県の拠出金や寄附金によりまして、1億5,000万円余りの基金を創設いたしまして、この基金を活用して、5年間で900人の高校生、教職員の海外留学、海外研修等を支援いたします。

11ページをお開きください。スポーツ人材活用推進事業、人材バンクでございます。

中学校や高等学校の運動部活動を支援するため、地域の人材を指導者として派遣する、新しいスポーツ人材バンクを構築いたします。人材バンクの構築に当たりましては、3名のコーディネーターを配置し、外部指導者の人材発掘や研修を行うとともに、エンドユーザーである学校や競技団体等へ積極的な広報活動を展開いたします。

12ページを御覧ください。地域スポーツクラブ推進事業でございます。

学校に希望する運動部活動がない生徒等を支援するため、県がモデル事業として、磐田市に地域スポーツクラブの設置を委託いたします。具体的には、2の(1)にありますとおり、一つは常設のスポーツチームの設置です。5月13日に磐田スポーツ部活の開始式が実施されまして、現在陸上部とラグビー部が活動しております。

更に、学校の運動部活動に加えて、より高いレベルの技術指導を望んでいる生徒を対象に、トレセン・スポーツ塾を開催いたします。また、健康づくり等のためにスポーツへの参加を希望する生徒に対して、スポーツ体験教室を開催いたします。

13ページを御覧ください。地域産業を支える実学奨励事業でございます。

本年10月上旬に草薙総合運動公園で、ふじのくに実学チャレンジフェスタを開催いたします。専門高校等による学習成果や課題研究などの発表や、作品の展示販売などを行い、新しい実学に対する社会的評価の向上を目指します。

14ページを御覧ください。外国人留学生受入強化事業でございます。

県内大学への留学生を増やすため、アジア圏の高校生を県に招き、キ

キャンパスツアーや講義の受講、文化体験などを通じて、県内大学の魅力を直接伝える取組を始めます。具体的には科学技術振興機構の日本・アジア青少年サイエンス交流事業の助成金を活用しまして、秋頃をめどに、約10人の学生を1週間程度受け入れます。この事業をきっかけに、留学生の増加のみならず、日本人学生の意欲向上やグローバル人材の育成につなげていく方針でございます。

続きまして、本年度の実践委員会の検討事項及び年間スケジュールについて、改めて御説明をいたします。

15ページを御覧ください。

4月24日の第1回県総合教育会議におきまして、「高等教育機関の機能強化と知的・人的資源の活用」、「徳のある人材の育成」、「個々の才能や個性を伸ばす多様な学習機会等の提供」、「地域ぐるみ、社会総がかりで取り組む教育力の向上」、以上4項目を本年度の総合教育会議で協議することが決定いたしました。

したがって、この4項目について、総合教育会議に先立ちまして、この実践委員会で御検討いただく予定でございます。

次に、年間スケジュールについて御説明をいたします。本年度実践委員会は年5回の開催を予定しております。各回の議事内容は、こちらに記載した内容を予定しておりますが、協議の進捗状況等によりまして変更になることがございます。

以上で事務局からの報告を終わります。

矢野委員長： どうもありがとうございました。

ただいまの事務局の説明につきまして、何か御質問はありますか。去年の成果と今年目標が説明されました。

今年初めて委員になられた方もいらっしゃいますので、例えば磐田のスポーツクラブについて、清宮委員から何かお話をいただければありがたいです。

清宮委員： おはようございます。

いろいろとありがとうございました。

お話があったように、5月13日に開校式を実施しまして、当日はラグビーと陸上の子供たちが、総勢40名ぐらいいでしょうか、参加してスタートを切りました。

3、4名の事務方の方がいらっしゃるのですけれども、非常に熱意のある、こんな方がいたのだという、適材適所な方に今回入っていただきました。1人は中学校の元教頭先生で、たまたまですけれども、早稲田大学陸上部のOBです。こういう部活動の普及に対し、ものすごく情熱を持たれている方が磐田市で働かれていたという幸運もありまして、この方が先頭に立って、この3年間でしっかりとした基礎、形をつくっていくと。本当に情熱に燃えたぎって、ギラギラしていまし

たので、これからの活動期間、本当によく注目していただきたいと思  
います。

私は、地域の会社、個人の方々に、この活動を支援していただけるよ  
う、後ろからバックアップする応援団になっていこうと思っております。

また、地域の代表として地域の責任を果たすという意味で、ヤマハ発  
動機の柳社長に私のほうからお願いをして、ヤマハ発動機からも1人、  
人件費をかけて、子供たちの普及に力を注いでもらっています。

矢野委員長： ありがとうございます。

磐田市のケースがモデルケースになって、県全体に広がっていくこと  
を願っております。

それでは、特に御質問がないようでしたら、本日の意見交換に入りた  
いと思います。本日のテーマは「高等教育機関の機能強化と知的・人  
的資源の活用」です。

それでは、事務局から配布資料の説明をお願いします。

事務局： それでは、事務局から御説明いたします。

お手元の資料の16ページを御覧ください。資料4の高等教育機関の機  
能強化と知的・人的資源の活用に関する論点でございます。

初めに、論点の背景について御説明させていただきます。

地域の高等教育機関、大学、大学院、短期大学、高等専門学校と研究  
機関は、地域社会、国際社会で活躍できる高度な人材の育成と、知的  
・人的資源の地域への還元により、地域経済の振興、地域社会の発展、  
若者の地域定着に寄与することが期待されております。

そこで、本県の高等教育機能を充実させるために、次の二つの論点を  
御提案させていただきます。

一つ目の論点は、高等教育機関等の連携でございます。

県内高等教育機関の魅力を向上させるために、高等教育機関や研究機  
関が、それぞれの地域性や専門分野を生かしながら、どのように連携  
することが必要かについて、御意見をいただければと存じます。

二つ目の論点は、高等教育機関等の知的・人的資源の活用ございま  
す。

県内の高等教育機関等が有する研究成果や優秀な人材を地域の教育に  
還元するために、どのような取組が必要かについて、御意見をいただ  
ければと存じます。

この二つの論点につきまして、それぞれ検討の視点も記載してござい  
ますので、この視点も御参考にしていただければと存じます。

続きまして、参考資料の説明に入りたいと思います。

まず、参考資料1を御覧ください。参考資料1は、論点1の高等教育  
機関等の連携に関する資料をまとめました。

1 ページをお開きください。

1 県内の高等学校卒業後の状況でございます。

右上の図12にございますとおり、県内の高等学校卒業後、大学、短大等に進学する者の割合は、53.9%となっております。

次に、2 ページから5 ページにかけて、県内の大学、大学院等の状況をまとめてございます。

2 ページには、高等教育機関の国公立、私立の区分や地区別の設置状況、3 ページには地区別、出身地別の学生数、4 ページには高等教育機関の入学者数、5 ページには学生の卒業後の状況をまとめてございますので、議論の参考として御活用ください。

次に、6 ページを御覧ください。

ふじのくに地域・大学コンソーシアムは、研究力、教育力の一層の向上と地域社会の発展に寄与していくことを目的に平成26年に設立された法人で、県内の高等教育機関22校のほか、県、商工団体等が会員となっております。

このふじのくにコンソーシアムの事業につきまして説明いたします。

7 ページを御覧ください。

ふじのくにコンソーシアムでは、複数の大学が連携して授業科目を開設し、それぞれの大学の講師が授業を実施する共同授業、短期集中型単位互換授業を実施しております。

次に、8 ページを御覧ください。

県西部地域の大学が、コンソーシアムの内部組織として、西部地域連携事業実施委員会を設け、共同授業等を実施しております。

以上が、コンソーシアムが実施する主な事業でございます。

次に、9 ページを御覧ください。

コンソーシアム以外の連携事業として、浜松医科大学、静岡大学、地元企業、静岡県等が参加するはままつ次世代光・健康医療産業創出拠点事業は、医と工、医工連携による健康・医療関連産業の創出を目指したものでございます。

次に、10 ページを御覧ください。

県内各大学では、民間等の寄附金によりまして、人件費や研究費などを賄う寄附講座等を実施しております。

続きまして、参考資料2を御覧ください。

参考資料2は、論点2の高等教育機関等の知的・人的資源の活用に関する資料をまとめてございます。

まず、1 ページでございますが、ふじのくにコンソーシアムでは、大学の教員が県内高校等で講義を行う出張講座を実施しております。昨年度の開催状況は、表に記載のとおりでございます。

次に、2 ページを御覧ください。

県では、高校生が大学に赴き、大学院生らと研究活動を行う高校生アカデミックチャレンジ事業を実施しております。高校生に、高度な研

究や学問に触れる機会を提供しようという事業でございます。

次に、3ページを御覧ください。

県内の国立・県立の研究機関を一覧にまとめてございます。

県の研究機関といたしましては、本県の産業分野に応じて、農林、畜産、水産、工業の各研究所が設置されておりますほか、環境分析等を行う環境衛生科学研究所、本年3月に開館いたしましたふじのくに地球環境史ミュージアム、また、現在建設中でございますが、富士山世界遺産センター、そして県立美術館がございます。

4ページには、これら国立・県立の研究機関を地図に示してございます。

次に、5ページから7ページにかけて、県の研究機関の研究員が県内の小学校、中学校、高校、あるいは大学に出向きまして開催している講座、あるいは研究所に児童、生徒を招いて開催している講座等をまとめてございます。

最後に、8ページを御覧ください。

県と県内大学、高等専門学校は、研究分野での連携を図るため、協定を締結しております。この協定によりまして、県の研究所と大学による共同研究の推進と、本県産業のさらなる技術力の向上が期待されております。

以上で事務局からの説明を終わります。

矢野委員長： ありがとうございます。

ただいまの事務局の説明につきまして、御質問、御意見があればお願いいたします。

(質問及び意見なし)

矢野委員長： それでは、御意見をいただく中で、また御質問があれば、その都度、質問していただきたいと思っております。

続いて、意見交換に入ります。

論点が二つ示されておりますけれども、どこから入っても良いと思っております。

初めに、池上先生、いかがでしょうか。

池上副委員長： 池上でございます。地元の公立大学の教員をしておりますので、その観点から少しお話をさせていただきたいと思っております。

今、事務局から御説明いただいたように、静岡県内には大学、高等教育機関や様々な研究所がたくさんあることに改めて感心いたしました。

その一方で、やはり静岡県は東部、中部、西部と、エリアの間に若干の距離がありまして、その距離がいささか心理的な障壁にもなっているというのを、静岡県の外で生まれ育った人間として、率直に感じる

ところでは。

とは言うものの、どうやって実行に移していくかがこの会議の一番のミッションですから、少し具体的な提案をしていきたいと思えます。

たくさんリソースがありますという話を、今、私たちは聞いたわけですが、それでは、どんなニーズがあるのかということがこの場で余り共有できていないと感じます。

冒頭でコーディネート機能が大事だというお話がございましたので、是非、子供たち、それは学校と言い換えてもいいと思えますけれども、学校にどういう高等教育機関や研究所に対するニーズがあるのかということ、もう少し体系的に示していただいて、そのニーズと高等教育機関・研究所のリソース・シーズをどうつなげていくといいのかというマッチングのあり方を「見える化」していく必要があるのではないかと思います。

私たちはこんなことができます、こんな研究をしていますというのを一方的に示すだけでは、やはり学校側もどのように取っ掛かりをつくれればいいかわからない。また、学校側のニーズだけ見えても、そこにいつどういう形で誰が出かけていくといいのかというコーディネートが、実は一番難しい。

そのコーディネートを知事部局が行うのか、教育委員会が行うのかは、県の中での調整だと思えますけれども、その見える化をうまくやれば、かなり機能していくのではないかという気がしています。これが1点目です。

それから、ふじのくに地域・大学コンソーシアムがあるのですけれども、これは、パンフレットを拝見すると、とても機能しているように見えるのですが、大学に身を置く者としての率直な印象を申し上げると、恐らく多くの大学の教員は、これをほとんど認識していないと思えます。名前は聞いたことがあるけれど、何をやっているのかわからないということです。なので、やっていることをもっと大学の教員たちに見せていくというのが、まずコンソーシアムを実体化していく上ですごく重要なことではないかと思えます。

それでは、そのやり方はどうすればいいのか、どう「見える化」していくのかですけれども、一つは成果をパッケージにして、各大学でちょとしたプレゼンテーションの機会などを持ってみてはどうかと思えます。

例えば、教授会の後、1時間ほど時間を取って、全員が出るのは難しいかもしれませんが、ふじのくに地域・大学コンソーシアムはこんな組織で、こんなことをこれまでやってきた。皆様の中に御希望があれば、例えばこんな資金がありますとか、こういう連携の枠組みがありますというようなことを、資料だけではなくて言葉で聞くと、先生方のイメージがとても膨らんでいくのではないかという気がします。今までそういう形で、コンソーシアムが大学に出向いて、自分たちのミ

ッション、ビジョンをしゃべる機会はありませんでしたので、是非それを、取っ掛かりとしてやってみてはどうかと思います。

以上、2点お話をいたしました。ありがとうございます。

矢野委員長： 池上先生の問題提起を皮切りにして、何か関連する御意見とかコメントがあれば。

はい、どうぞ。

鈴木委員： 大学コンソーシアムについてですけれども、先ほど池上副委員長のお話にもあったとおり、教員の方に余り認識が及んでいないということでしたが、学生も、コンソーシアムに対する認識はとても薄いです。この説明の冊子には、単位互換や共同授業など、参加した人がいたという話がありましたが、周りの友達や研究会の仲間などを見ても、コンソーシアム自体を知らない人がいるというのは事実です。

先ほどおっしゃったとおり、静岡県が東部、中部、西部と分かれているということで、大学の距離が離れていて、しかも、コンソーシアムを活発に行っている他の都市部に比べて、大学の数が少ないといった問題点が上がっていると思います。

でも、だからこそ、静岡ならではの大学コンソーシアムの活動を考えていく必要があると思います。大学の数が少ないということは、地元の高校生や地元からすれば、大学が非常に限定されていて、わかりやすくなっているのではないかと思います。

だから、大学コンソーシアムの授業として、高校生と一緒に行う授業などを増やすことによって、大学の認知を更に広げて、進学を迷っている高校生に、地元で活躍するという選択肢を一つ大きく与える活動をしていくことが、県内の教育機関の機能的な充実にもつながってくるのではないかと考えております。

以上です。

矢野委員長： どうもありがとうございました。

委員に御就任されたばかりで指名して申し訳ないのですが、白井先生、大学コンソーシアムについてのいろいろな問題提起がありましたが、中にお入りになっておられて、どういうふうにお考えでしょうか。

白井委員： ありがとうございます。

私自身は静岡大学に着任してまだ3年目で、とても日が浅いのですけれども、大学コンソーシアムを知って、こんな面白い試みがあるのかと思って、すぐにこの研究助成に飛び付きました。静岡以外から来た人間ですので、とても斬新な試みだと思います。

大学コンソーシアムの助成研究をして、大変ポジティブに捉えているのは、大学コンソーシアムという枠組みがあって、構成団体が高等教

育機関と地方自治体などであることによって、大変研究がしやすかったです。静岡県や地方自治体が会員になっていますので、地域の課題を解決するという研究目的に対して、すごく賛同が得られて、研究体制がとても組みやすく、研究がとても順調に進みました。

それで、成果物として外国人のDV防止の課題を解決するという取組ができたわけですがけれども、これは、そのまま是非継続をしていきたい。研究助成という形で、こういう組織で研究を後押しするのは大変すばらしいと思います。

ただ、改善すべきといますか、より理念に沿った活動を強化していくために今後取り組んだらどうかと思ったのが、公募方式でやったらどうかと思いました。

今回、研究助成、いわゆる外部資金を獲得するという形で、私自身が研究プロジェクトを組んで、それで申込みをして審査に通ったわけですがけれども、例えば、こういう課題を研究したいと思うのだけれども、コンソーシアムの会員の大学教員や学生はこれを一緒にやりませんかというような形、この指とまれ方式のような形でやると、関心のある大学生や関心のある大学の教育者、研究者の方々も集まりやすい。そこで新たな研究組織ができるというのもまた面白いのではないかと思います。

今回、私自身が少ないコネクションで研究組織を立ち上げたわけですがけれども、結果として、やはりそれだけでは取組が十分できなくて、大学院生の方に参加していただいたりして、研究組織が広がっていきましましたので、最初から公募方式で関心のある方々がプロジェクトを組めれば、より理念に沿った広い活動ができるのではないかと思います。

コンソーシアムについては以上です。

矢野委員長： せっかくなつくつたのに、コンソーシアムが先生の間でも学生の間でも知られていないのはもったいないです。どうしたらいいのでしょうか。

今、コンソーシアムが取り組んでいる一番大きなテーマ、課題は何なのでしょう。研究活動が中心なのでしょう。それとも、各大学共通の留学生の問題、あるいは単位の互換とか、そういう点に重点があるのでしょうか。

白井委員： このコンソーシアムの試みで、もっと広がったらいと思うのは単位互換です。パンフレットには4大学で単位互換制度が締結されていて、短期集中の単位互換授業を行っているところがあるのですが、静岡大学に関して言うと、静岡大学は県立大学と協定を結んでいて、かなり多くの授業が、県立大学と静岡大学の間で単位互換の対象になっています。

けれども、それ以外の大学とは、授業をオープンに公開することがなかなかできていなくて、すごく限られた講座の中でだけ単位互換がさ



れている形なので、もっともっとコンソーシアムに参加している大学で広く一般の授業についても単位互換が進んでいくと、学生間の交流だけではなく、教員間の交流や研究の交流も進んでいくのではないかと大学に身を置く者として感じております。

事務局： 今、コンソーシアムが力を入れているのは、単位互換の授業です。  
しかし、大学と大学の間には距離がありますので、単位互換協定を結んでも、学生がその授業を受けるために、前後の授業を休まなければならないということで、なかなか難しいと聞きます。  
そういったことをクリアするために、合宿式で、いろいろな大学の方が一緒に議論したりする単位互換授業をコンソーシアムで実施したところでは、  
ただし、大学に参加していただくには、各大学で単位認定をしていただかなければならないので、なかなか難しい面もあるのですが、昨年度は富士山関係の授業をやり、今年度はお茶も含めて、授業を増やしていくということになっております。  
それから、ゼミ学生地域貢献推進事業というものがありまして、これは各市町から市町の持っている課題を出していただいて、それに対して、参加大学のゼミ単位で課題解決に応募していただいて、市町と大学生が一緒になって課題を解決するというものでございます。

矢野委員長： コンソーシアムがもっと広く知られるような活動に、少し力を入れていただくといいかもしれません。内部に事業計画を立案する委員会などもあると思いますので、そういうところで取り上げていただくといいのではないでしょうか。  
それから、ニーズとシーズのお話がありましたけれども、大学の外から見て、大学に何を望むかということで、そういう観点から少し御意見をいただけるとありがたいと思います。  
片野さん、どうぞ。

片野委員： 函南で酪農をやっております、片野です。  
私は、静岡の農業、一次産業を中心に、学術との融合、高等教育機関などにある知識を僕ら一次産業、農業者に還元していただけるようなシステムがあつたらいいなと常々考えていまして、別紙の資料として、タイムリーに「専門職大学創設を答申」という記事が、昨日の静岡新聞の夕刊に載っていたので、今日の題目の一助になるかと思って、今日、職員の方にコピーしていただきました。  
去年から私が言っているのは、小学校、中学校の一貫もそうなのですが、けれども、高校もできれば高専のように、農業高校も5年制なり7年制になったら、そこで知識を高めて、それを自分のものにして消化して、それを研究し、発表し、地域社会の現場にいる人間にその技術、

知恵を提供していただけるような、そういうシステムが構築できるのではないのかと、この専門職大学創設という新聞を見たときに思いました。いよいよ現実的にできそうな感じなのかと。

高校3年間で、高校生は知識を吸収するのに精いっぱいだと思います。その中で研究して、またそれを社会に還元するとなるとなかなか酷なものがあります。

そこで、静岡県には静岡大学の農学部もありますし、農林大学校もありますけれども、もう一つ、専門職大学というものを通じて、私の地域には田方農業高等学校がごございますので、そこを、例えば更に2年、専攻科なりを増やすことによって、そこでまた更に研究という形がつくられて、地域の農業のために、この知識を消化し、研究したものを下ろしてくれることを期待しています。

また、そういうことによって、高校1年生が5年生なりを見て、自分の将来的なビジョンを立てやすくなるのではないかと期待しています。

産学協働という言葉は、もう聞いて久しいのですが、私も一度だけ恩恵を受けたことがあります。牛の餌に添加する乳酸菌を作って欲しいと頼んだところが沼津高専でした。

農業と何の関係もないと一般の人は思うかもしれませんが、沼津高専の物質工学科では、そういう微生物関係のこともやっておりまして、そういうことで、牛の餌に合った乳酸菌を開発していただき、特許を取るところまで至りまして、非常に活用できる餌が作れるようになりました。

それを踏まえて、更に期待しているのが、地元にある農業高校がこういうところまで上がっていただければ、すごくありがたいと思います。子供たちが年々いろいろな研究発表をして、その中で一つでも二つでも拾える技術があるのならば、物すごくありがたい話です。

更に言えば、静岡県東部には潜在的なポテンシャル、国立遺伝研究所や沼津高専がありますし、いろいろな研究機関があるわけで、そういう中の総合的な互換、教育の互換もできます。研究所同士の共同研究ができるようになるためにも、この専門職大学の半世紀ぶりの法改正を生かしていったならば、また、農業の大学、研究に関して静岡の幅が広がってくるのではないかと思います。

そういう中で地域と共生し合う、私も牛を飼っていますので、牛を採血させて欲しいというなら協力しますし、いろいろな研究材料も提供できると思います。

この昨日の夕刊の専門職大学の創設ということに関して、すごく期待感を持っております。

以上です。

矢野委員長： どうもありがとうございました。

これまで論議されてきたのかもしれませんが、何かこの専門職大学に

ついて、事務局に情報はありますか。

事務局： これから、国が制度設計等を行うことになると思います。詳細は、順次把握していきたいと考えております。

矢野委員長： はい、わかりました。  
それでは、藤田さん、どうぞ。

藤田委員： なすびの藤田と申します。静岡で料理屋を営んでおります。  
前のコンソーシアムのところまで戻ってしまうかもしれないですが、よろしいでしょうか。

矢野委員長： どうぞ。

藤田委員： 今日ここに来る前に、文部科学省のホームページで、それぞれの県が抱えている教育的な問題、それぞれの県の方々が上げた問題点や解決策というページを興味深く見てきたのですけれども、その中で、秋田県がやはり同じ形で地域自立、学生の自立、子供たちの自立というポイントの中で、精神的自立と経済的自立について書かれていた部分がありました。

精神的な自立は、スポーツ等を通じて、高校生や学生が自立していくことができる。それでは、経済的な自立はどのような形で解決していくのかということが書かれておまして、私もこの経済的な自立がとても大事だと思います。

今、私たちが外食産業を営んでいる中で、アルバイトの募集をいろいろな募集誌に出しても、なかなか学生が集まらない現状があります。

学生が何で集まらないのか。うちだけではなくて、全ての業界において、学生が働かない。親が支援をたくさんしてあげていたり、夜10時以降は安全のために家から出さなかったりと、いろいろなことがあります。びっくりしたのが、大学生なのに、バイト先に御両親が迎えに来たりする状況があるのです。

県のこういう会議で、いろいろな部分の研究や勉強をされている中で、県内企業の実態としては、教育の現場とは違った私生活の現場では、求めていることとやろうとしていることが、大分乖離しているなと思っておりました。そんな中で、先ほど言った経済的な自立というところで、うまくコンソーシアムやインターンを組み合わせたりできないものかと思っております。

働くということがまずどういうことか。

たまたま私の同級生が学校の教員をやっているのですけれども、協賛金を募る関係で私のところに来て、2,000円か3,000円ぐらいの協賛金だったので、私が領収書をとという話をしたら、領収書の書

き方がわからなかったりとか、一般的な社会で知っていることを学校の先生は知らなかったりして、学校で学んでいることと社会は大分違うのではないかと思いました。

例えば、今日働いたお給料はいつ払われるのかということ、当たり前のことなのですが、月末に締めて、給与計算をやって、翌月末か20日に給料が払われると思うのです。今日働いたら月末にもらえる、若しくはその日にもらえると思っている学生もいらっしゃるかもしれません。

地域経済の振興や地域社会の発展ということを考えたら、まず働くということがどういうことなのかを単位を通じて勉強できたり、地域社会ともっと早い段階でつながったりすると面白いのではないかと思います。

そういった意味で、インターンや職場見学だけではなく、実際に働いて給料をもらって、どうしたらお金がもらえるのかを、勉学ではなく社会の中で学生に教えることが、地元企業ともつながりますし、働くことの目的や地域の発展につながるのではないかと思います。

実は今朝、妻といろいろな話をしていたのですが、優秀な人ばかりではなく、現場で働いて、営業して、考えるだけではなく体を使って働くということもとても大事で、その人たちが大多数を占めているのだから、そこへもう少し目を向けて、学生のうちに働くことを教えたりすることが大事なのではないかという話をしてきました。

大学と連携して、地元企業との連携ができていくと、いろいろな形で新しい取組にもなってくるし、県内企業に及ぼす影響も大きくなるのかなと思ひまして御意見をさせていただきました。

矢野委員長： 今のお話を興味深く伺ったのですが、それは大学に在籍したまま、週に1日働くとか、あるいはアルバイトするとか、そういうことを想定しておられるのでしょうか。

藤田委員： はい。本当に今、学生が働かないのです。近くで働いて、早く帰りたいなど、働く目的が、学費や食費を稼ぐためではなく、何か少し知り合いをつくりたいとか、少し時間が空いたからというぐらいなのです。

私が学生のときは、学費とか食費を稼ぐために精いっぱいやっていた時代があったのですが、今、社会が変わってきていますので、働くことから乖離してしまうような気がしました。

矢野委員長： ありがとうございます。  
藪田さんいかがですか。

藪田委員： まさに今、藤田さんがおっしゃったことと同じことになってしまうかもしれないのですが。

私は、遠洋かつお1本釣りの漁業を営んでおります。遠洋漁業ということもありまして、子供たちは水産高校等で多少の知識を得てくるのですけれども、親御さんの知識が全くありません。

例えば、先月、優秀な大学を出て、漁師になりたいと言って来て、その子は親に勘当されてもいいからということで、坊主頭にして来たのですが、出航の前日に、お母さんが泣きながら来まして、この子は本当にこういう子ではなくて、船に乗っても務まらないから降ろしてくださいということで、もうどうしようもない状況でしたので、家族、お母さんに大事に育ててもらったのだから、しっかり家族で話し合ってから、次の航海に乗りなさいということで、本人を説得しました。

そこまでひどい件はないですけれども、やはり毎年1人、2人の親御さんがそういったことで話をしてきたり、あとは給料面で、子供がわからないからということで、何度も会社に連絡をしてきたりする方が多くなっています。

少し話は違うのですが、漁業に関して言わせていただきますと、静岡県は、静岡県立漁業高等学園や焼津水産高校もありまして、子供たちにとっては、他の県と比べれば大変恵まれている県だと思います。

ただし、船での安全教育とかロープワーク等はしっかり教えてもらえるのですけれども、コストの面とか、実際やりたい漁業に関する指導者が少ないというのもあるとは思いますが、現場レベルに入ると全く通用しない子が多いです。

そういった面では、漁業の場合、漁業者が教えるというのは難しいことかもしれませんが、台風や禁漁期など漁業者も漁に出られないときがありますので、そういう時間を使って生徒さんに教えるとか、企業も積極的に漁業のノウハウをしっかりと教えていかないと、漁業が継続できない事態になると思うので、こういう機会に、積極的に企業との交流を図っていただければと思います。

以上です。

矢野委員長： 高校教育という観点から見て、大学についての御要望とか御意見をお持ちだと思いますので、埴先生、よろしくお願いします。

埴委員： 埴です。現場から言わせてもらおうと、高校教育の中での進路指導は、実態としては、単なる交通整理に近いと思います。大学で何ができるのか、どんな能力を開花することができるのか。この辺がわからないのです。

例えば、これから大学に進学して勉強するのに、どこの大学に蔵書がどれだけあるか知らない。理系であれば、実験機器のあるなしもあります。実験機器があったとしても、どのレベルのものがどれだけあるのか、あるいは認可が必要なものは認可が取っているのか、そういうことは一切知らないままです。ましてや、奨学金がどうなっているか、

そんなことも一切知らないわけです。

ですから、先ほどのコンソーシアムみたいなものがあるとありがたいです。大学に入ってからこんなはずではなかった、過不足の不足の部分を補えればと思います。

であれば、県内の研究機関は、全てコンソーシアムに取り組んだらどうかと思います。下田の筑波の臨海センターが入っていません。小中高生が、セミナー・実験等に参加しております。それから単位互換は、私大から来ている生徒さんがいましたでしょうか、大学院レベルでしょうか。可能性を広げる意味では、まだまだ取り込めるものは多々あるのかなと思います。

また、教育現場も、やはり大学について理解をしっかりと深める必要があると感じております。

以上です。

矢野委員長： 大学、あるいはいろいろな研究機関から高校・中学に臨時講師を派遣して、いろいろな勉強の機会を与えるということがかなり広く行われていますが、その点について、美術館や博物館は、そういう機会が多いのでしょうか。

渡邊さんいかがでしょうか。

渡邊委員： 三島にあります佐野美術館の館長をしております。

今日のテーマは高等教育が中心でしたので、私が余り話すことはないのですが、実は最後に、できたら少し意見を申し上げたいと思っていたことが、徳の教育ということです。

徳を教育する根底は、やはり知識である。だけど、知識だけでは徳は深められないので、やはり感性も問題です。知は高等教育で得られるのですが、情という、感性を育てるのは高等教育に行くとき遅いのです。やはり小学生ぐらい、本当はその下がいいのですけれども、小学校が一番大切です。その間にどういう情操教育を受けるかによって、高等教育の方向性が決まるのではないかと思います。

それで、静岡県内の美術館では、小学校・中学校の子供たち、生徒をいかに美術館に来させるかということで、キッズアートプロジェクトというものをつくりまして、それで小中学生は、全県どこに行っても美術館に無料で入れるという制度をつくって、そして手帳をつくって、手帳にスタンプを押して、何回来ると御褒美を上げるという形にしております。

平成27年度で6万5千人ぐらい、小中学生が美術館に来ているのです。これは毎年毎年1万人ずつ増えてきて、非常に成果が上がっているのですが、実はこれでいいかということ、ここに問題がありまして。子供が手帳にスタンプをもらいに来ると、子供を連れてきたお母さんは入場料を払わなければならないので受付で待っていて、「あなた、行っ

てらっしゃい。」、「あなた、5時に帰ってきてね。」と。まあ来ないよりもいいのですけれども。

それで、感性というのは、物を見たときに自分の感動を発信して、親なり先生なり友達がそれを受け止めて、その次の感情につながるのです。子供が「見てきたよ。」と言っても、親は「何を見てきたの。どうなの。」というところに行かないものですから。スタンプを押して、人数は増えるのですけれども、実際にはつながらない。

本当はヨーロッパみたいに、美術館に先生たちが来て、子供たちがぺたぺたそこに座って1時間も話をしている。その中で感情が豊かになっていくのです。感動したらそれを話す。そこにその個人の言葉が新しく生まれることによって、新たな情操が育まれるのだと思います。

どうしたら会話ができるかということです。今、私どもやMOA美術館がやっていますけれども、小学校・中学校の要請を受けて、学校に出前授業で、実際に実物を持って行って、みんなの手に触らせてみたりして、それを見た後、今度は自分たちでそれを作品にさせる。そして、作品にしたものを美術館のロビーに全部持ってきたりするというのを今やっているのですが、各市町の教育委員会は動かないのです。

各学校の意識の強い教員が、直接美術館に要請してくるのです。それで、学校は予算が付かないですから、美術館が全部奉仕で、忙しい学芸員が教材を美術館から抱えて学校へ行って、それを見せながら教育してくるのです。それは、両方とも奉仕でやっているのです。これをもう少し教育委員会として形づくって、わずかでも旅費とか美術館の学芸員の日当ぐらいが出ると、やりやすくなると思います。

とにかく実物に触れる。例えば、静岡県の埋蔵文化財センターには、うなるほど縄文土器があるのです。あれを子供たちに手に持たせたって、全然文化度は減らない。2000年、もっと3000年も4000年も昔の日本人が作った、祖先が作った焼き物があって、その縄文土器というのは、世界の民族の中で一番古く作られている。その縄文土器ができたゆえに日本人の食が、西洋ではほとんど焼いて食べるのですが、煮たり蒸したりする。そういうことによって、非常に食が多彩化するのです。日本の食文化の原点が、縄文土器にあるのです。そういうものもあわせて、先生たちと子供たちが話すことで、子供たちの夢とか創造力が物すごく広がると思います。

大学教育と高校教育の連携はいいのですけれども、美術館と学校教育がもっともっと結び付くと、徳の教育には、かなりプラスになるのではないかと思います。

矢野委員長： すばらしい問題提起だと思います。お話を伺っていると、もう既に具体化はしていますけれども、他の皆様の御意見も伺って、具体化を一層進めるということが出来ますね。

渡 邊 委 員： はい、そう思います。

矢 野 委 員 長： 余り限定しませんので、これから御自由に御発言いただければと存じます。加藤暁子さん、どうぞ。

加藤（暁）委員： 今までの議論の中で、国際化という議論がされていないと思うので、その点について触れさせていただきたいと思ったのですが、外から見ていて静岡の強みというのは、農業とか漁業とか、いろいろな分野があると思います。アジアの国からインバウンドでたくさんのお観光客の方々が来られるのですけれども、日本の食に非常に興味があって、おいしい物を食べたいということが、相当増えていると思います。

逆に、例えば今、マレーシアでもなかなか肉牛のクオリティーが低いのです。それで、日本の和牛を食べに来る人たちが多くなっていて、どんどん東南アジアの人たちの舌が肥えてきたのです。そして、帰ってみるとそれが余りおいしくないということで、例えば、マハティールさんなんかは、自分のふるさとのケダ州に土地を買って、そこで日本型の肉牛の飼育ができないかということで、今、東奔西走しています。

そういう意味からいっても、東南アジア、中国含めて、何か農業関係で、このコンソーシアムと海外の農業体、大学の農学部などと連携をして、向こうからも留学生が来て、こちらからも向こうに出ていくということで、それが直接向こうの産業につながるということでやっていく。例えば、タイでも、メロンの技術を習いに日本に来られたりしているのです。農業をずっとやっていた人もいますけれども、いわゆるビジネスマンの方が、海外でもこれは経営的に成り立つのではないかということで、アジアでは農業に新たに参入する人口が非常に増えているのです。ですから、農業経営も含めて、何か一緒にやっていけることがあるなと感じました。

それから、私の娘が行っていた都立国際高校は、ちょうど隣が東京大学の教養学部のキャンパスなのです。コンソーシアムには、高校への出張講座がありますが、高校に大学の教授たちが出張していくというのみならず、土曜日などを活用して、逆に高校生たちが地域の大学に講座を受けに行くということをする、むしろ大学のキャンパスの中でやるほうが高校生の夢が広がるのではないかと思います。

以上です。

矢 野 委 員 長： 国際化の話が出ましたが、静岡県に外国からの留学生はどれぐらいいるのでしょうか。何かデータをお持ちでしょうか。

事 務 局： 大学生は、平成27年5月1日現在で878人です。



矢野委員長： 878人という数字は、余り多いように思えないのですが、どうなのでしょう。

事務局： 最近減少しております。

矢野委員長： 減少しているのですか。これから、特にアジア・太平洋地域になると思いますけれども、海外からの留学生を増やすことが大事なテーマになってくると思います。  
この点について、何か御意見はありますか。

埴委員： 藤枝明誠の埴です。先ほどマレーシアの話がありましたけれども、本校でも4月6日に、マレーシアから42人が来校しました。当日は朝、新任式がありまして、その後、始業式がありまして、午後から入学式、そして更に夜、保護者との懇親会がある中でしたけれども、やる気があれば、そういう環境の中でも来ていただくのに何も抵抗がないのです。

なぜそうしているかと言いますと、高校レベルで交流事業を進めますと、大学に進学した後のフットワークがかなり軽いのです。現在、ニュージーランド、フランス、中国、タイ、様々なところから、お子さんたちが留学生として在籍しております。

それと、留学生たちが入ってくる、あるいは交流活動で生徒の家にホームステイするなりしますと、後のつながりが非常に深くなります。ですから、一度交流活動をすればそれで終わりではなくて、その後何年も続くということもあります。ですから、子供たちにとって、全体としての教育を高めるには、交流活動はすばらしいことだと思います。

それから先ほど留学生の数の話が出ましたけれども、今年、インドから1人留学生が来ました。高校レベルではインドからの留学生は、その1人だけだそうです。エリアは限らず、地球上にはいろいろな方々がおりますので、いろいろと交流を進めることができればと思います。

加藤（暁）委員： 今のことについて、少しよろしいですか。

矢野委員長： どうぞ。

加藤（暁）委員： 私、実はAFS日本協会というところで評議員をしているのですが、私自身もそれで1970年代にアメリカに1年間留学したのですが、今、ホストファミリーを探すのがすごく大変になっています。

例えば、この団体だったら60カ国の留学生がいますので、ある意味、留学生はよりどりみどりで。

県立高校、私立も含めて、静岡で1校に1人でもいいから1年間のホストファミリーを探していただいて、1校に1人ずつ1年間の留学生

を受け入れていただくと、家庭に負担は掛かりますが、県の予算措置はゼロ円です。

そういうホストファミリーを探していただけて、それが1校に1人ずつあったら、静岡県内にたくさんの高校生が来て、それがまた一つの力になっていくと思います。

私も今、全国から高校生を集めて、福岡で2週間のサマースクールをやっていますけれども、静岡の子は10人来ますが、試しに2年前から、170人の日本の高校生にアジアから日本語のできる高校生を20人入れたところ、物すごく効果があったのは、そのアジアの子たちよりも日本の子たちだったのです。

理由は何かという、彼らは母国語ができる、英語もぺらぺら、そして日本語も敬語からため口から何でもしゃべれるので、僕たちは日本語しかできないということで発奮して、その後、英語をすごく勉強するようになって、思わぬ化学反応を起こして、普通は行けないと思っていた大学もチャレンジするようになったという例がたくさん生まれました。

ですから、ホストファミリーをやっていただいて、そういう子が1人でも学校の中にいると親も変わるのではないかと思います。先ほども過保護な親の話がありましたけれども、そういう異文化に触れるということが、自分の子供と比較してみて、いかに親として愚かかということがわかるのです。

これから世の中が混沌とした時代に、自分に生き抜く力がなければ死んでしまいます。私たちみたいな人間は、戦後のいい時代に生きてきて、地震もそんなにない、すごく安定期に生まれてきた本当に希少な世代であって、これからは大変な時代になっていくわけですから、子供たちが海外で生き抜く力を付けるためには、静岡県の中でできる国際交流というものを抜本的に考えてみることも大事なのではないかと思います。

矢野委員長： それは高校もそうですが、大学もキャンパス自体が国際化していくことがすごく大事で、これからの課題ですね。

静岡県の各大学もそういう目標を持っておられると思いますが、それをいろいろな形で応援する奨学金、それから寮、それから今お話があったホストファミリーのような環境を整備していくことも大事だと思います。

加藤百合子さん、どうぞ。

加藤（百）委員： エムスクエア・ラボの加藤です。農業事業をやっております。

農業の話も出たのですが、国際化という観点で言うと、農業はもう既にすごい国際化をしていて、アジアの人たちを大分受け入れていますので、アジアへ進出する農業者もいますし、オーストラリアで大規模

に農業をやる生産者もいて、国際的な産業になりつつあります。

ベトナムの方とお話ししていると、向こうには大企業がデジタル・アグリカルチャー・アソシエーションというコンソーシアムをつくっていきまして、この人たちは日本に10万人ぐらい送れるという話をしています。なので、今、農林中金をはじめJAと日本農業法人協会がタッグを組んで、10万人ではないですけども、どうやって受け入れるのだという話をし始めています。静岡は比較的外国人が多いほうだと思いますが、地域にいろいろな国籍の方たちが入ってくるのではないかと思います。

もう一つ、大学と小・中・高との接続の話なのですが、私は実践する場がないのかなと感じています。実は、アグリアーツという名前を付けて、農業を軸にしたリベラルアーツを学んでもらおうという事業を、私が住んでいる菊川市で地方創生加速化交付金を取りに行つて、今年度の事業を3,800万円位の予算で組み立てています。

明日、参加者を募り始めるので、どうなるかわからないですが、公募する中でいろいろな企業とか教育委員会とか、地域でいろいろな活動をしている方たちとお話をさせていただいております。

そうすると、皆さんやりたい、やりたいとおっしゃって、すごく嬉しい反応なのです。中学校も全校協力してくれますし、民間企業で都心に本社を置くようなところも、うちは通信とセンサーがあるから提供しますとか、地域の人たちは畑と空き家を提供してくださって、どんな改造をしてもいいというので、これからペンキを稼ぎに行こうとか、農産物を売って、きちっと部費は自分たちで稼ぐというプログラムを走らせます。

最終的に年度末は株主総会ならぬそういう企業サポーター、それから地域サポーターの人たちに対して収支の報告会を行つて、来年度の計画を行つて1年が終了と。農業を使っているのですけれども、起業家教育をして、ソーシャルイノベーターを地域から輩出しないと次の担い手がないという危機感のもと、立ち上げました。

部活にしたいと思つていて、中学生を対象にはするのですけれども、そこに大学生とか地域の高校生にも協力の申し出をいただいていますので、私がロボット系なものですから、そういう中で農業ロボットを開発してみたりとか、センシングとか、水力発電を作ってみたりとか、そういう活動も一緒にできると思っています。

なので、何か発散する場がないというか、小さくてもいいから実践する場をつくると、皆様、そうやってやりたい、やりたいとなると思うので、このアグリアーツ自体は、フランチャイズしようと思つていますが、大きな地域を対象には無理だと思つていますので、それぞれの地域で似たような取組ができるのではないかと考えています。

矢野委員長： ありがとうございます。

藤田さん、どうぞ。

藤田委員： 論点の高等教育機関等の連携のところで、高校生が県内の大学等で学びたくなるということ、もう一度振り返って話をさせていただきます。何で東京の大学を選んで静岡の大学を選ばないかという、東京に行きたい理由は、東京にいろいろな物・人・情報があって魅力があるからだと思います。

例えば、一般的に大学の先生には真面目なイメージがあるのだけれども、静岡の高等教育機関には、すごい先生がいて、実はすごく経済とつながっているとか、変わっているとか面白いとか、先生自体にすごく魅力があると。これは、高校にも言えると思うのですけれども、先生は勉強だけを教えるのではなくて、もっと大切なことがあると思うので、もっと先生に魅力を付けるために、先生がもっといろいろな地域社会の人の中に入って行って、地元の現状を知って、地域社会とつながって欲しいと思います。

それと、皆様のお話を伺っていて、例えば経営学部に行けば簿記をやって、経営学をやって、経済学もやって、それで、一般教養という、文化人類学とかいろいろ選ぶと思うのです。その中に、芸術や農業や働くということを選んで単位の取得ができるようなプログラムがあって、その選択肢をもっと増やしてあげることが大事だと思いました。

それともう一点、先ほどの国際交流の関係で一つお話しさせていただくと、うちは毎年、静岡市の国際交流協会から友好姉妹提携都市の方を招き入れているのですけれども、県もやっているかもしれませんが、自分に興味があって、情報を取りに行かなければ、なかなかその情報が入ってきません。国際交流協会の方々も受け入れ先を探しているのですが、そこがミスマッチで、うまくマッチングできていない中で、先ほどの加藤さんの話ではないのですけれども、1校に1人割り当てるぐらいの形で行政と学校が結びついて、向こうのニーズと、こちらのウォンツをしっかりと合わせてあげれば、もっとスムーズに行くと思います。一番迷っているのは、そのマッチングの部分ではないかと思えますので、それを是非仕組み化していただけると、静岡県で持っている国際ネットワークと学校を結び付けるだけで、断然変わってくると思いましたので、御提案させていただきます。

矢野委員長： ありがとうございます。  
加藤暁子さん、どうぞ。

加藤（暁）委員： この大学コンソーシアムにフェイスブックとホームページがあるということで、今、ちょっとスマホで検索してみたのですけれども、例えばフェイスブックは、「いいね！」をしているのが、わずか四百幾つしかありません。せつかく作っているのに、これを広めないという意味が

ないと思います。そのためには、静岡県庁のホームページとか観光案内には、一般の人たちがたくさんアクセスすると思うので、そこにリンクを貼って、そこからすぐぱっと飛んで、この大学コンソーシアムのページを見ることができるようになると、せっかくなことをされていらっしやるし、例えばこの県立大学のパンフレットを見ると、お茶の関係だとか、本当に先進的な、静岡にしかない授業があるので、世の中の人に知られていないのがもったいない気がします。特に若者は、フェイスブックとかラインとか、そういうものを見るので、そういう仕組みを作ったら、わっと広がるのではないのでしょうか。あと、静岡出身の芸能人を使うとか、何かそういうPRをされたらどうかと思いました。

矢野委員長： 情報を調べるためには、どうしたらいいかということも大事なことです。大学コンソーシアムには、大学だけではなくて県や市も入っていますから、協議の場があると思いますので、そういうところで是非、今日の意見交換の中身を御紹介いただきたいと思います。  
それでは、竹原さん、お願いします。

竹原委員： はい。私は論点2のことを中心に考えています。既に高等教育機関や研究機関が学校に出向いたり、地域で市の財産を次の世代に伝えたりされていると思いますし、小中学校、高校生が本物に触れるために高等教育機関などに入ることもあるかもしれません。それをいかに継続性のある仕組みとしていくか、そして、社会に開かれた教育課程が提案されていますが、そこにどう落とし込んで、どういう学びになっているのかを、もう少し丁寧に意識しないといけないと思います。

そのためには、今、高等教育機関、研究機関が何をしているか。小学校1年生から高校3年生までに、どういう知の提供をしているか、体験活動を提供しているかを「見える化」するリストを作って、まず現状把握をする。小学校3年生ならこれぐらい、高校2年生で理科ならこれができるのだということがだんだん見えてくると、学校現場は活かしやすくなるし、波及効果が大きくなると思います。

それは時系列で、学年と教科で表すとともに、地図で表すこともできると思いますので、まず、そういう情報共有をされることが大事だと思います。その中で、学校が小さな成功体験を重ね、よかったという実感をはっきり持たれたときに、それが広がると思います。

そこにはニーズとシーズをつなぐ人が必要で、既に小中学校では学校と地域を結ぶコーディネーターが活動していますし、高等学校でも既に動いているところがありますが、高等教育機関はこれからかと思います。連携の窓口の担当者はいらっしやると思いますが、それは事務的な担当者であって、ともに育てるというミッションを共有した上で、コーディネートができるような担当者がいてくださると、地域とも他

の機関とも良い関係が作れると考えております。

矢野委員長： ありがとうございます。  
白井さん、どうぞ。

白井委員： 今いただいた御意見に私も賛同なので、補足的に意見を言わせていただきたいのですが、私は、静岡大学に所属をしていて、春のこの時期になると、「あなたはどのような研修ができますか」というリストに、追加・変更があったら書いてくださいという調査が、年に1回だけ回ってきます。

それは、県内の公務員の方を対象にした研修の「見える化」のリストなのです。私は、例えばジェンダー教育と書き込むわけですが、そういうリストを小・中・高に公開するだけでも、かなり活用できると思いますし、新たにこれから人材バンクをつくって、その人材バンクに大学生や留学生を入れるとか、人材バンクがもっと広がればいいとは思いますが、まずは今あるそういったリストを広く共有することも、それほどコストがかからず、いいのではないかと思います。

矢野委員長： 清宮さん、どうぞ。

清宮委員： 皆様のお話を伺って、今、僕の頭の中のイメージは、机の上の状態です。何がどうなっているかわからない。いいものがたくさんあるのだけれど、そこにたどり着くのは奇跡という感覚です。

皆様のおっしゃることはすごく素晴らしいことで、美術館で縄文土器を手にしていろいろな感覚を得るとか、アルバイトしながら働く体験をしてみるとか、農業体験とか、絶対悪い話ではないですけども、根本的に何が問題なのか考えると、忙し過ぎるのではないかと思います。今の学生たちは本当に時間がないのではないかと。何でこんなに時間がないのだろうと深掘りすると、僕は、教育現場の力が足りないのではないかと思います。

本来、こういうことは全部高校・大学の中にあってもいいのではないかと感じます。そんなことを言っても解決しないので、それでは静岡らしく何かというと、静岡の大学に通った人間は1年間カリキュラムが真っ白で、世の中に出て行って全部単位にして発表するとか、日本中の県立大学や公共の教育機関で、学校で授業をしないのは画期的です。そうやって世の中に出ていったらどうかと考えていました。

どうやったらこの財産を、地元の子供たちが活用できるのか。そうでなければ、やはり東京に行ってしまう。でも地元には、地元でしか体験できないものがある。だったら、どういう独自性を出せるかだと思います。

矢野委員長： 鈴木さん、どうぞ。

鈴木委員： 私は、大学のゼミ活動である大学コンソーシアムのゼミ支援開発事業で焼津市の方と触れ合ったり、静岡県立大学が行っているCOC授業で牧之原市の高校生と話したりする機会がありました。そのときに感じたことは、やはり静岡の大学というと、高校生から地域の殻にこもった大学と思われがちだと感じました。

しかし、実際に地域が抱えている課題は、解決するのにグローバルな視点が必要不可欠です。身に付けるべき能力や素養は、都市で行われている大学の教育と何ら変わることはありませんので、その後の研究があくまで地域の解決に向きやすいというだけだと思います。

だから、そういったことや、なぜ静岡の大学に自分が進学したかという詳しい背景や、今行っている大学で学んでいることを高校生に直接話すことができると、高校生には東京に何となく行くという人もいますので、地域で活躍するという選択肢を与えることが、今の静岡の高校生に対しては重要なことではないかと思います。

実際、自分も学歴志向というか、学歴コンプレックスみたいなのところがありまして、静岡の大学より、何も考えずにとりあえず東京の大学に行きたいと考えた時期もありましたので、そういったときに、地元で働いている社会人や地元の大学生と話すことがあったら、何かそのときに変わったのかなと思います。

大学コンソーシアムの授業として、高校に出張する授業などがあるということでしたが、実際に、1日、2日出張で来られても、ためになる話がありますが、やはり心の印象には残りづらいと思いますので、更に継続的に、1週間に1度、1カ月に1度でもいいですから、大学生と高校生が定期的に会って話ができる場をつくっていくことが大切ではないでしょうか。

以上です。

矢野委員長： ありがとうございます。

池上先生、どうぞ。

池上副委員長： 皆様のお話が非常に展開している様子を、私も刺激を受けながら聞いておりました。

大学に身を置いて、昨年まで4年間、教務部長という役職でカリキュラム改定にも関わった立場で、少し現実的なお話をしたいと思います。

まず一つは、県としても、共同授業の受け皿となる科目を設けるように、各大学に呼びかけていくことが必要だと思います。大学によっては、こういう科目をやりたいと言っても、急にポンとそれを作ることができません。カリキュラムの中に、いきなり加えることはできないものです。ただし、いわゆる受け皿科目と業界では言うのですけれど

も、例えば、人間科学特論のような名前の科目があって、その中身がどういう内容なのかというのは、そのときそのときで変わり得るとい  
うのが、受け皿です。

例えば、私どもの静岡文化芸術大学の場合だと、その受け皿科目でコ  
ンソーシアム、西部の共同授業などを単位認定しています。その受け  
皿科目で、富士山に関する授業などを受講した学生が単位化されてい  
く。受け皿科目がないと、学生が受講してもそれを大学が単位認定で  
きないので、そこを呼びかけていくのが具体的な一つです。

それから一方で、単位認定の対象にしてしまうと、今の鈴木さんの御  
提案からすると、高校生が参加するのには少し動きにくい面があって、  
私自身はやはり高校生と大学生が、一緒に何かをやる場をつくるとい  
うのはとても大事だと思います。

高校生は予備知識が少ないのだけれども、大学生と一緒に現場に向  
いて、大学生はやはりすごいなと、こういう学びをするのは格好いい  
なという動機付けが、まさに高校生が県内の大学等で学びたくなるの  
とつながってくると思います。

鈴木さんは、とてもいいことをおっしゃっていて、地域の現場にグロ  
ーバルな課題の最先端が見られるわけです。だからグローバルな課題  
が宙に浮いているのではなくて、現場にあるわけだから、それが静岡  
県なら静岡県で、例えば私の分野で言うと外国人の子供たちの問題だ  
とか、まさにグローバルな人の移動の最先端が見えてくる。それで、  
自分が関わることでどう変えていけるかという解決の糸口を探す。そ  
れが理論的にどういう背景の中で考えていったらいいか勉強につな  
がるという、こういう学びを是非実現したいと思います。

ですから、単に大学生の単位にすればいいという方向の発想だけでは  
なくて、単位化をあえてしないことで、高校生や大学生が地域の人と  
かかわっていくような、そういう発想も重要だと思います。

3点目は、やはり専従のスタッフがどうしても必要だと思います。私  
は、このコンソーシアムがうまく機能していない一番大きな問題は、  
人の問題だと考えています。その専従のスタッフは、先ほど来の話で  
国際的なニーズにも対応するといいいということなので、例えば東南ア  
ジアの国から「こんなことを静岡県で何とか考えられないか」という  
話をコンソーシアムが受け皿となって、それを参加している自治体な  
り大学なりに振り分けていくという国際的な調整機能までできると、  
本当にすごいコンソーシアムになると思います。

逆に言うと、コンソーシアムが現状のままでは、今出てきたような国  
際的な連携の窓口となることはほぼ無理だと思いますので、未来への  
投資と思って、ここに人を付けていただくことを、今日は知事がいら  
っしゃいますので、申し上げておきたいと思います。ありがとうございました。



矢野委員長： どうもありがとうございました。  
奥島先生、お願いします。

奥島委員： 私、話し出すと1時間はしゃべらないとどうも気が済まないの、論点が散漫になってはいけないと思って黙っていましたが、やはり今、これを取り上げてしゃべってみようと考えては、差し支えが多過ぎることに気がつきまして、教育の現場のことではなくて、私が運営しておりますボーイスカウトを例にして、そちらのほうで思い切り悪口を申し上げます。この問題を考える一つの手がかりにさせていただければいいと思います。

今、ボーイスカウト運動が、非常にだめになってきております。なぜだめになってきているかという、一つは内容が非常に空疎になってきてしまっている。それから、団とか隊と言われるような組織が、がたがたになってきている。それから更に言えば、指導者が高齢化してきている。とにかくいい所なしというのが、現在の状態でありまして、そういう中で全体を立ち上げようと思っております。

現在の日本の業態において、あらゆるところで指導者の問題が非常に大事なのではないか。それからもう一つは、コンソーシアムとかいろいろなお題目は唱えるけれども、しかし、実態的にはお粗末極まることがありますし、それからまた、新しい考えを次々出してくるけれども、何一つ定着してきていないという状況が、ボーイスカウトでもありますが、実は教育界、人づくりの場合にも、こういった問題があるのではないかということで、カエルの学園ではありませんけれども、そちらのお話をしておきたいと思います。

私は、叩いて叩いて叩き込めということが、教育の一つの基本だと思っています。イギリスのパブリックスクールという稀有の制度がイギリスを救ったと、イギリスでは評価されておりますけれども、要するにあの学校は、叩いて叩いて叩き込むのです。どういうふうに叩き込むかという、午前中は勉強に集中し、午後はスポーツに熱中する。これです。非常にやっていることは単純です。単純だけれども、これでリーダーシップを持った人物が育ってくる。

例えば、チャーチルはパブリックスクールの劣等生だと言われております。パブリックスクールの出身者でオックスフォード、ケンブリッジに合格しない者は、イギリス的な言い方をすれば、一つの劣等生です。しかし、彼がイギリスを救ったと言われております。

それはやはり、教育の持つ意味合いであって、どこでそういう問題が起こってくるかという、例えばボーイスカウトの場合でも進級制度というのがありまして、一番上が富士スカウトといいます。ソニーの井深さんは物すごくボーイスカウトに感動して、それでその富士賞をとっている者は無試験でもってソニーに採用しておられました。しかし、すぐにだめになりました。なぜかと言えば、採用してみると余り

にもお粗末だったからです。制度というものは魂が抜けた、そういう技能賞とか、いろいろな試験を通るという形でやっていくと、賞は取れるかもしれないけれども、しかし、それでもって立派な人格が形成され、有能なリーダーシップを持った人間が育つかどうかは、これは別問題です。

だから、私がいつも考えているのは、根本的にまず自立性をどうやって育てるかが一番大事であって、今、ボーイスカウトでもそのことをやっているわけです。なぜかと言いますと、ボーイスカウト運動が楽しくなければ誰もついてきません。しかし、楽しくするために、いろいろなことに手を出していけば、スポーツとか芸術とか、様々な課題がありますから、どの道へ行っても負けていきます。

例えば、今一番ボーイスカウトで問題になっている奉仕活動を見てみますと、ボーイスカウトで食いつけた者たちが世の中に出ていって、NPO法人をつくって、それで自分たちが食っております。したがって、簡単に言うと、ボーイスカウトのそれまでの売りであった奉仕活動と言われるものは、もうほとんどそういう支援団体にとって代わられている。

ところが、その市民団体の奉仕活動というのは、自分たちの生活のためにつくられているわけですから、そういう市民団体がどうしているかということ、例えば県の事業の指定団体を取っているのは、ほとんどボーイスカウト崩れで、本当にそれが世のため人のために生きていくかは、とても疑問であります。これはボーイスカウトのことですから、全てのことがそうだと言っているわけではないということは御理解いただきたいと思います。

ですから、大事なものは、何もかも一斉にやっている人は、うまくいかないよと。どこかに拠点を持っていく、そういうモデルケース、うまくいっているところを徹底的にバックアップして成功事例をつくっていくやり方を考えていくべきではないかと思えます。

一般論でボーイスカウトについて申しておりますけれども、しかし、それはこういう問題を考える場合にも、地域の拠点になるものがそう簡単にできるわけがありませんし、また全ての地域が自立するなどというのは、ここで考えられているような意味で、本当に自立することができる能力と意欲をもって、それだけの人材を育てるところがあるのでしょうか。そういうことを考えていきますと、いいモデルをつくることによって、全体を少しずつつくり上げていくやり方を考えていく必要があると思えます。

一般的にそんなに簡単にいろいろなことを用意ドンで競争しろと言ったって、それでうまくいくとは限らない。教育というものは特にそうだと私は思っております、いいものを伸ばしていくところから始めるべきではないかということを一般的に申し上げまして、差し障りが多いので、個別的なことを申し上げませんが、この程度にいたします。

矢野委員長： ありがとうございます。

私たちの考えも、小さく産んで大きく育てるということだと思います。最初から大きく産むのはなかなか大変ですが、良いアイデアが生まれれば、どこからか始めることができます。そのための具体的な提案を皆様にお考えいただきたいと思います。

大学、研究機関、あるいは大学生と高校生との交流が話題になりましたが、今日のリストには技術系の、理工系の研究機関が網羅されているのですが、それ以外にも社会科学系、人文系の研究機関もたくさんあります。それから、各企業の研究所や研究機関もたくさんあって、むしろそういうところのほうが現場に近い場合が多いと思いますので、幅広くそれを活用することも大事ではないでしょうか。

これというまとまりのない進行になりまして誠に申し訳ないのですが、いろいろなヒントが出てきましたので、一度これをまとめまして、次回の委員会で整理して、また皆様の御意見を承って、この議論の方向性を確かめたいと思います。

それでは、知事から最後に御意見をいただきたいと思います。

川勝知事： 一言御礼を申し上げます。ありがとうございます。

高等教育機関の連携ということで、今日は教育委員会から興先生が御出席されておられますけれども、静岡県には20余りの大学があって、しかし、ばらばらにやっているということで、学長先生が集まってネットワークを作っていこうというところから始まりまして、ようやく昨年、コンソーシアムというところにまで育て上げたのです。そして、そこに市町も加わってくれましたので、まだ呱呱の声を上げたばかりだということです。しかし、これに対して様々な建設的な御意見をいただきましてありがとうございました。

今日は、筑波の下田の施設が入っていないということを言われましたが、それはそうだなと思って、あそこはなかなかいいところですから。私は大学だけではなくて、そういう大学の出先機関、企業の研究機関、それから私どもの持っている研究機関、こうしたものを全部教育機関と位置付けまして、連携する必要があると思います。これをコンソーシアムと、これはコンソーシアムという言葉ですね。

実は、国でもやっております。共同利用機関といいまして、例えば、民族学博物館という世界トップクラスの民族学の研究機関が日本にあります。あるいは歴史民俗博物館というのが、千葉のほうにあります。あるいは国際日本文化研究センターというのがあります。そうしたものが全部入って共同利用する。

例えば、自分は早稲田を出たと。けれども、自分の先生はもう引退されていない。博士論文をまとめたいのだけれども、どこに出したらいいのかといったときに、そこに出せばいろいろな先生方に審査してい

ただいて、修士号なり博士号なりを出せるということになって、思ったときに吉日で勉強できるようにするというような共同利用機関を、県立でつくってみようと、全部それに入れてみようとっております。

ただ、それには人と場所が要るのです。それを東静岡につくるということで、もう場所も決め、基本計画を編んでいただきまして、今、伊藤滋先生という大先生にまとめていただいて、決まれば設計に入って建物をつくりまします。2年でつくれますから。

そうすると、今、それぞれの大学でやっていただいているいろいろな科目を、そこに来れば、例えば大学の先生ではなくても、漁業者だとか農業経営士だとか、ここにはいらっしやらないけれども林家だとか、大学のプロフェッサー並みの第一次産業に携わる方がいらっしやいます。それから、料理やスポーツなど様々な専門家がいます。その全部を糾合していこうとっております。何も15で義務教育が終わって、すぐに高等学校、大学に進むということだけが人生ではない、思い立ったときに大事だと、こういうことです。

その中で一番大切にしているのは、英・数・国・理・社だけではありませんということ。知は高くなる必要があります。情けは深く、意は強く。心を磨いて身体を鍛える、こういうことが極めて大切で、これは基本なのですけれども、これをどう形にするかということなのです。そのために実学を大事にしたいと。

それで留学生は、留学生という形では900人弱しかいません。しかし、実際にはすごくたくさんの方々が来ているのです。モンゴルからも、あるいはベトナム、東南アジアからもたくさん来ていますが、短期的に帰っていく。

それで、大体何を学びたいのかというと、日本の清潔感だとか、第一次産業なのです。第一次産業は遅れていると思っていた。ところが、食べ物を見ただけで、メロンを見ただけで、あるいはイチゴを見ただけで。ドイツの人だって、イチゴを噛んだらとげが生えていますから、舌を切るでしょう。静岡のイチゴなんて芸術品ですよ。農業芸術品だと。しかも日本で一番多い。

ですから、実はそれを作っている人も芸術だと。そこには技術がある。品種改良、土地の改良、肥料の研究がある。様々なインターネットを通じたものが入っているということで、第一次産業は、世界全体の第一次産業を見たときにトップクラスになる。だからここを力点的にやる。そうすると、これはアジアの中でトップクラスなのです。

だから私は、JICAのグローバル大学院大学をつくれと文科省に相当言って、JICAの親分にも相当言ったのですけれども、彼らの理解が低いですね。

青年たちが外に出たいというのは当たり前です。だから出るなというのはおかしい。私がもしここに育ったら、東京を見てみたい、あるいは北海道に行ってみたい、九州に行ってみたい、韓国に行ってみたい

と思いますよ。それを止めてはいけない。

ただし、静岡の地が世界に通じているということを見せておかないといけない。だから、ここの大学、あるいは研究機関が、世界と通じているということを見せなくてはいけないと思っているのです。

そのためにどうしたらいいのかということで、例えば、全然関係ないようですけれども、富士山が世界文化遺産になりまして、世界クラスのもので2年半で、何と23件も登録されることになりました。東京だけが憧れの対象ではありません。我々は世界から国際的な認定を受けている、こういうところですよ。

これは小さい意識改革なのです。俺たちは東京の外れではないのだと。あるいは中京の外れではないのだと。それ自体が世界に通じている、通じている人たちがいる、世界に通じている人たちの教育機関、研究機関があるということになれば、何も静岡から出ていくだけではなくて、向こうから来ることもありますから、出入りのパイプをもっと大きくしようということで、出ていく人がいるかもしれないけれども、入ってくる人はもっと多いと。あるいは入ってくる人が多ければ、戻ってくる人がいますから。

ですから、「出ていくな」などという、さもないことは言わない。もっと大いに世界を見てこいと。ただし、戻ってこられるだけの形をつくっておこうと思っています。

今、渡邊さんがおっしゃったように、体も意志も強めるためには、情操教育は、本当に小さいときからやらなくてははいけないのです。

それから、もう一つ大切なことは自立なのですが、日本の自立、これは学問でやりました。学問の自立が、日本の自立です。地域の自立も、実は教育の自立なのです。教育の自立は、教えられる子供たち、また先生の自立なのですが、どうしたらいいか、子供を親御さんから離すことなのです。

それでは、親御さんから離すためにはどうしたらいいかというと、寄宿舎があります。奥島先生がおっしゃったパブリックスクール、あるいはパブリックスクールに入る前にプレパラトリースクールというものがあります。そこでも月曜から金曜までは学校なのです。土日に迎えに来られる。春休み、夏休み、クリスマス休暇などがありますから、そのときにはお父さん、お母さんのところに帰ると。

ですから、いきなりはできませんが、一旦子供を引き離すというようなもの、学校には校舎が余っているところがありますから、そこは水も来ています。それなりの食事を出して、そして子供を預かる。それが親のありがたさと同時に共同生活というものになっていく。

これは親も心配しますので、一気にできません。しかし地域でこれを支えていくというふうにしていく。まず、私はスポーツから、あるいは芸術から始めていますけれども、次は第一次産業だと。

それから、高等教育機関を全部糾合して、研究所に行って、研究おた

くみたいになっている人たちがたくさんいますから、その人たちが若い青年たちに教育できるだけのものを持っているかどうかを試させようと思っております、この1年の間に予算をつけまして、このコンソーシアム、一気に形にします。

言い換えると、県レベル、ふじのくにレベルにおける共同利用研究機関に育てて、場所も提供すると。そこに、いろいろな人、人材バンクだけではなくて、例えば、インターンをしてくださるインターン企業バンクのようなものを設けて、制度設計が若干要りますけれども、ここでは単位を認定できるようにする。できる人がいればできるところからやっていきます。小さく産んで大きく育てるということで、もうこれは、やる以外ないのです。

ですから、動中の工夫は静中の工夫に勝ること百千億倍、つまり、ここでしゃべっていても、しょうがないのですよ。働きながらやると。失敗しても、実践委員会で一応責任を持つと。その責任は、最終的に私が取るということで、何をやっているかわかっていれば、責任は上が取るということ的前提にした上で、動中の工夫、つまり動きながらの工夫が、実はこういう座学よりもはるかに功が多いというのが、白隠禅師の言葉ですから。それを実践します。

はっきり言いまして、昨年度の1回目は、一体何を言ったらいいのかと手探りでした。しかし、今日は違いますね。明らかに1年間の成果が出ています。また、新しく入ってくださった3先生も思ったことを言っていて、藤枝明誠は私学だからできることがある。そうなのです。地域だからできることがある。そうなのだ。何も大したことのない文部科学省の顔色を見てやってきたような教育委員会からはもうおさらばして、我々が教育委員会のつもりでやればよいというつもりでおりますので、よろしく願いいたします。

矢野委員長： ありがとうございます。

予定の時間となりましたので、今日の会議は、これで終わりたいと思います。

例えば、渡邊さんのお話のように、徳のある人材の育成というところにつながる問題提起もありましたので、また次回、いろいろと御意見をいただければと思います。

今日、皆様からいただいた御意見を踏まえまして、総合教育会議の場で知事から県教育委員会に御提案をいただくということになります。

先ほども申し上げましたが、次回のテーマは「徳のある人材の育成」ですけれども、今回のまとめをもう一回やってみたいと思います。

以上で、予定した議事を終了しましたので、事務局に進行をお返しします。

事務局： 矢野委員長、ありがとうございます。委員の皆様、長時間にわたり、

ありがとうございました。第2回の実践委員会につきましては、7月中の開催を予定しております。詳細につきましては、後日事務局から皆様に御連絡をいたします。

それでは、以上をもちまして、第1回地域自立のための「人づくり・学校づくり」実践委員会を終了いたします。委員の皆様、ありがとうございました。